中学校吹奏楽部のチューバ指導法

音楽教育専門　國分　雅喜
指導　瀧川　淳　講師

チューバは和音の根音を担い、全体のテンポ感を決める重要な存在である。しかし中学校の部活動では、チューバの基礎能力不足や、曖昧な指導などが多く見られる。このような現状から、中学校吹奏楽部でよりよい演奏につながるようなチューバ指導法を検討することを目的とする。

考察の手順は以下の通り。第１章では、日本の中高生によく学ばれている教則本４冊を取り上げ、チューバの基本的奏法について各本の特徴を分析、比較しチューバに求められる技術・音色を考察した。第２章は、チューバ奏者や他の楽器の奏者にチューバに関するアンケート実施し考察した。第３章では、それまでの考察から吹奏楽チューバ奏者に必要な基礎能力を明らかにした。

以上の考察から導かれた結論は以下の２点である。教則本の検討からチューバ演奏で必要な基礎は、呼吸、バズィング、タンギング、ロングトーン、音階であることがわかった。次にアンケートの分析からチューバに求められる技術・音色は、ソルフェージュ能力、アンサンブル能力、豊かな音色であることが明らかにされた。

ムツィオ・クレメンティの『グラドゥス・アド・パルナッスム』に関する一考察

音楽教育専門　　松崎 萌美
指導　河口 道朗　教授

本研究は、ムツィオ・クレメンティ（1752—1832）の作曲したソナチネop.36 no. 1 ～６（1797）が、鍵盤楽器のための100曲の小品からなる、『グラドゥス・アド・パルナッスム　Gradus ad Parnassum』（1817, 1819, 1826）へ到達する課程のひとつとして、どのように位置づけられているのか、そしてその意義について、明らかにしようとするものである。

第１章では、ソナタとソナチネの概要に触れ、第２節にてソナチネop.36 no. 1 の分析がされている。第２章では、梅本俊和の「もうひとつの『グラドゥス』オリジナル版全100曲を概観する」を参考に、『グラドゥス・アド・パルナッスム』の特徴や構成についてまとめられている。第３章では、第１節にてソナチネop.36の楽譜を比較し、第２節でソナチネの存在意義について述べている。

ソナチネop.36 no. 1 は、音楽の要素であるリズム、メロディー、ハーモニーの３要素をふくみ、短い楽章ながらソナタ形式でまとめられており、形式を理解する基礎となっていると考えられる。『グラドゥス・アド・パルナッスム』は、組曲が構成されていることや、対位法的作品が多いことからも、形式の基礎を理解している必要があると思われる。すなわち、ソナチネop.36 no.1は、『グラドゥス・アド・パルナッスム』に取り組むにあたり基本となる、形式の基礎や音楽の要素が、簡潔にまとめられた楽曲のひとつと言えるのではなかろうか。

ヴィルトゥオーゾとしてのアードルフ・ヘンゼルト
—ヴィルヘルム・フォン・レンツ『知遇を得た今日の偉大なピアノフォルテのヴィルトゥオーゾたち』をもとに—

音楽学専門　　高山　祐佳
指導　上尾　信也教授

本論文では、19世紀にヴィルトゥオーゾとして活躍したアードルフ・ヘンゼルト　Georg Martin Adolf von Henselt (1814-1889)について取り上げ、ヴィルヘルム・フォン・レンツ　Wilhelm von Lenz (1809-1883)の著作『Die Grossen Pianoforte-Virtuosen unsere Zeit aus Persönlicher Bekanntschaft』（1872年）の英訳版（『Great Piano Virtuoso of Our Time』Madelein R. Baker訳、1899年)をもとにヘンゼルトの当時の評価と、レンツの批評の根底にある「ドイツ性」について考察を行った。

第1章では、レンツとヘンゼルトの生涯を概括し、両者の関係やと彼らの交友関係、ヘンゼルトの作品について述べた。第2章では、レンツ著作内の第4章にあたる「ヘンゼルト」についてまとめた。レンツは、ヘンゼルトをリスト(1811-1886)やショパン(1810-1849)、ウェーバー(1786-1826)らと比較し、ヴィルトゥオーゾとして当時リストやショパンと同等の地位にあったことを主張している。第3章では、第2章をもとにヘンゼルトのピアノの演奏技巧とレンツが評価する「ドイツ性」について論じた。レンツの述べた、ヘンゼルトのピアノの技巧と他の作曲家の作品解釈の素晴らしさは今日でも再評価されるべきであろう。さらに、同時代のリストやショパンにはなかった「ドイツ性」こそが彼自身の個性やヴィルトゥオーゾとしての評価につながったというレンツの見解には頷けるものがある。

レオポルド・ゴドフスキー《ショパンのエチュードによる練習曲集》
―ピアノ音楽における左手独奏の可能性―

音楽学専門　佐々木　雄大
指導　向井　大策　講師

本論文では、20世紀を代表するヴィルトゥオーゾ・ピアニストであり、作曲家であったレオポルド・ゴドフスキー Leopold Godowsky（1870〜1938）の《ショパンのエチュードによる練習曲集 Studien über die Etüden von Chopin》から、左手独奏用の作品を取り上げ、ゴドフスキーが、どのようにして、左手のみのピアノ演奏の可能性を開拓していったのかを、楽曲構造および演奏法を分析することにより、明らかにしていく。

ゴドフスキーは、ピアノの表現力の拡大を目指す過程で、左手の機能性の向上が不可欠だと判断し、左手独奏用の作品を書き始めた。その最初の作品が《ショパンのエチュードによる練習曲集》である。この曲集でゴドフスキーは、ショパンのアイディアを忠実に生かしながら、大胆な楽想の追加やパラフレーズを行うことで、より高度な技巧性と独自性を備えたものへと発展させている。全53曲のなかの22曲が左手独奏の作品となっている。

ゴドフスキーは、ショパンのエチュードを、ただ左手のみで演奏できるように置き換えただけでない。上下の声部の交換、テンポの変更を施すことで、左手のみでの演奏を可能にしている。また原調のままで演奏が困難な作品は、演奏しやすいよう転調した。対位法的な演奏を得意としたゴドフスキーは、対旋律の追加、ポリリズムなどといった対位法的な要素を取り入れ、さらに音域の拡大、楽曲構造を変容させている。ゴドフスキーは、ショパンの原曲を生かしつつも、彼自身の個性を楽曲に加えることによって、より一層表現豊かな作品にすることに成功している。